

興亞青年勤勞報國隊に参加して

滿洲國琿春方面獨立中隊倉田部隊山田隊

天野賢定

この種の機關誌に發表する程の價值あるものでないが、諸君の御一讀願ひ得れば幸甚の至りである。因より淺學非才の自分が大陸に渡り、そして茲に筆を執るのであるから、滿足を與へ得るが如き異彩を持たない事は言ふ迄もないが、現地で見聞した事を主にして、思出を辿りつゝ認めて見た。

一、はしがき

興亞青年勤勞報國隊の一員として、約五十日間、或は内原の青少年義勇訓練所の集團修練乃至大陸での國境建設特殊作業と、顧みれば實に感慨無量であり、生涯忘れ難き思出の一頁を、生涯に刻みつけた。現地に身を投じて聖業の一端に従事した實感は、之を語らんとしても表現し得ない。百聞不如一見、で實相は體得であり、冷暖自知の外にないのである。次に問はれるものは「どうだった」「何か得る處があつたか」と口癖のやうであつたが、問ふ人は唯々滿洲はよい所か悪い所か位の氣持であらうが、答へる立場では簡単に言ひ難いものがある。

總べて見た通り聞いた通りではなく皆豫想以外であつた。例へば内原^{ウチハラ}に於ける内原は、滿洲通過後のそれとは異り、隨つて滿洲に對するそれも現地に於けるのは大分差が生じたのであつた。傍から見て樂なやうな仕事もやつて見れば案外苦が伴ひ、食事でも今迄味無いものと思ひ込んで居つたものも、勤勞の後頬張る時の醐醒味、天下一品であり、浴槽にある泥水も何百人の入浴に給するなど、今迄淨穢苦樂と漫然と考へて居た先見も打破られて、結極それは單に觀念の遊戲に過ぎないと言ふ事に逢着した。確に物心共に尠からざる獲物は筆舌も及ばないが、獲物を持ち歸るべき風呂敷も持合せなかつた自分は、道眼明ならず、畢竟寶山に往來し空手還郷の感、慚愧に堪へぬものがある。然しお互に體得したる成果は今後に裨益する所大であつて、聽て實のる時期のある事を確信するのである。

二、ソ滿鮮國境にて

目的地に到着する迄内地外地共に人手を煩はし、萬事行届いた準備で物心共に歡送され歡迎されて、いやが上にも感謝の奉仕、否奉仕の奉仕を誓つて、日滿兩國旗を先頭に、燃ゆるが如き愛國心と、潑刺たる意氣とを以て、大陸の一角に力強き第一步を示したのであつた。滿洲をば何百里も隔離した丸で地球の裏側へでも行くが如き考へを懷いてゐた昔の人々に對して、今日に於ては時間的に非常に短縮され世界も狭くなつた事を語るものである。然し戰車などに於て双方とも頑強な抵抗を以て、所謂『西部戰線異常なし』と言ふ如きに至つては、僅か一里の進退も數十日を要する距離たる事は否めぬ。自分達の派遣地は日滿ソの一觸即發の國境警備特別區域で、琿春附近獨立中隊として教官及び醫療班を合して、約百五十名の全國から集つた夫々異なる方面を專攻する學生諸君と、集團勤勞を營む事になつたのである。内地で想像もつかぬ山又山の邊地で、晝は野郎(犖)が來て夜は娘(狼)が來るとはかう言ふ地帯であ。或

る警察豫備隊の兵舎を借りて起居したのであるが、漫々的に動く彼等であるから、炊事場も便所も風呂も引上げる頃に漸く完備した程であつた。東方母國に面する山は、物すごい感じのするソ満國境嶺線と、彼我の監視してゐる山である。何時もその附近は暗雲が靡いて全體は見えなかつたが、大聲すれば届く程である。この舍庭で幾度有意義な事を行つたか擧げ切れぬ。朝禮に、運動に、座談に、或は〇〇防衛司令官を迎へて、野戰料理で暁くまで宴席を賑はした事など、自分達が來た爲めにどんなにソ聯の神経を鋭くした事であらう。時として我が監視哨の望遠鏡で彼の状況をのぞく事もあつた。敵恐るるに足らず。だが油断はならぬ。彼は唯々軍器のみ集めてそれに頼つてゐる有様で、要するに犬の遠吠えに似てゐる。極東根據地を壁一重で我軍と隔ててゐるのであるから、防備は嚴重である。

國境地帯に於ては、理窟は通らない。地圖ではカク／＼と示しても、一二分で飛行機が越境して來る。現に到着の暁なども非常管制であつた。スパイや密偵の難も恐れて嚴重警戒をなし、兵舎の四圍に鐵條網をめぐらし、物々しい中に起居し作業に従事した。作業は〇〇〇の整備、乃至××××の構築であつたが、作業場は國境とは數丁、山越しに演習の砲彈も聞え、實戰を髣髴させ乍ら緊張の度を増し、有事に役立つ備へる細き腕でやり續けた。勤勞奉仕によつて團體訓練と言ふ一石二鳥、何れにしても苦が多かつた。が併し勤勞必ずしも苦ではない。苦中樂を見出し、勞働の神聖さを體得せねば無意味なものであり、否勞働そのものこそその面目であると思ふ。吾々の苦と言へば、不馴の勤勞、統制による不自由さ、その他食物、訓練協同生活、宿營施設の不備等の事であらう。困難不備は幾他開拓の先覺者が嘗めた苦汗を同様に辿るものであるから、我々はその本面目を見出さないまでも、その意義と使命とを感じて、或程度まで甘受せねばならんと思ふ。將來の奉仕團に對しても當局に於て、大いに關心を寄せられ、物資、設備等の圓滑を計る事と豫想出來るが、之も完全を期して能事必了とは言はれまい。欲を言へば鍛鍊の道場であつて欲し

い。同じ報國でも皇軍將士は血をもてするに、吾々は汗を以てそれに相當するものならば、自ら考への違ふ所があらねばならぬ。嘗に外部の勤勞のみならず、數多馴れない内務も當番で繰出し、炊事、風呂、衛兵、本部、舍内、水汲み、食事、不寝番、清掃等の當番によつて夫々收得があり、活きた典座教訓なり、正法眼藏が讀み取られた。それが爲め物見を兼ねんとした者には、不満もあつた。然しそれは一二隊員にして、大きな目標の爲めにはかゝる末梢的な些事も仕方あるまい。兎も角も身心兩方面の幾多難關を潜りぬけ、理窟なしに聖歟を揮つた體驗は、最大の至福であり、又聽て子孫の爲めに語り得る材料ともなるであらう。他に詳しい報道機關がある事と思ふが、所見として取上げて見れば次の如くである。

彼國は開闢以來八ヶ年、隆々たる進歩を以て昇天の勢を見せてゐるが、大局から見ると、いまだ及ばぬものがある。即ちよくなる處ではあるが未だ完成されてゐないのである。教育にしても四ヶ年制度であつて、後は試験につて進級出来る優級學校と言ふのがある。中等學校或は教導學校など漸次勃興しつつある有様にて、日本と比して、各年限に差こそあれ、眞面目さに於て一概に何れを是とし何れを否とし難い點が少くない。住民の大部分は無學文盲であるが通學してゐる生徒達は何れの民族も熱心である。半島人も滿人も學校では日本語を習得してゐるが、家庭では親達と從來の言葉を使用せねばならぬ有様である。故に國境地區では子供でさへも日滿鮮等の言葉に通じ、教養ある人に至つては、英獨佛語に通ずる人もあり、複雑な問題の起る原因も此處に存するであらう。其點に於ては國語一色の日本人は幸福であるが、教育普及と共にその幸福に馴れて、勤勉ならぬ文明人は逆に非文明にして不幸とも言へる。宗教方面は自分の立場から「死に對する觀念」「土民の信仰」或は「植民地の信仰狀態」乃至「大陸に於ける精神的糧」の何たるかを問題として臨んだのであつたが、十分その意圖は遂げられなかつた事を遺憾に思ふ。目下キリスト教の

根強い蔓延によつて、如何なる山間にも行き亘つて、その布教熱には學ぶ所があつた。佛教でも日本人の居る處必ず本願寺の存在と言ふ事で、宗門青年僧侶として反省すべき點が多かつた。彼等は孝を重んずると同時に、昇天を願ふのである。然しその孝は忠と一本と言ふそれでもなく、昇天と言ふもその天の意味も漠然として大方迷信と見られる處が多かつた。但し昔から日本に接近してゐる間島では、源義經を土神として信仰して居る事を聞いて興味深い現であると思つた。

三、人間よりも人物の要望

一般民衆の精神内容も、時日短くして且つ雑多な人種の集りであつた爲め、皮相な見解に相違ないが大方國境地は匪賊の歸順して農民になつた者、ソ聯から逃げて來た者、或は日本併合を肯んぜず越境し來つた半島人等が多かつた。随つて一號令の下に全部が動くやうなものではない。自分は中隊の本部に居つて、割合多く省或は縣の役員に或は近くの職人夫等と接し、或は街に出て公所、店鋪へ行く機械が、多かつたがその時つくづく感じた事は、まだ王道樂土の國家たるには前途遼遠たるものがあると言ふ事であつた。相互は利己的であり、随つて従事する仕事には誠意がない。茲が日系官吏の幾星霜苦しむ癩であると思ふ。未だ阿片を飲んで惰眠を貪り、夏は割合に働くが冬は冬眠蟄居してゐるのであり、總じて彼等は全く當にならぬ存在である。卑近な例で言ふと鮪の罐詰が鯉に變つてゐるのであり、まだ茶を飲んでゆつくり構えてゐるのに、「もう着く頃です」と電話で言つて來る仕末にて、約束もむづかしい。大陸に漫々的と言ふ言葉があるが、恐らく日本人が入つてから流行したものらしい。併し之までよく導き育てあげてくれた先輩の功蹟は、幾多認められるのである。一朝一夕に改め難いもので、之を強いて急轉せんとする處に日本人の

失敗も伴ふわけである。日清日露以來幾萬の犠牲を拂ひつつ産んだ滿洲であるが、自分は之を道樂息子と呼びたい。遊び方も人後に落ちず、金使ひも荒い、教養もあまりない、喧嘩も好きで、病氣もよくする。彼等の國家的思想は未だ幼稚である。唯々自由に安樂に暮されれば日本でも滿洲でもソ聯でもよい。然し彼等の求むるその自由とは果して如何なるものか、眞の自由を意味するものでは勿論ない。日本の如き國家的義務を盡して權利を惠まらる事すら窮屈らしい。之等の民族を指導するには餘程確かりした人材を要する事は言を待たぬ。單に罪人を追ひやる所でもなく、一植民地でもない。眞に之を育くんで我が兄弟として、共存共榮ねばならぬのである。それを滿洲は食ひつめた者がブローカーか、未開人の行く處との先入主視は誤りであつた。悪い兄弟としてはならぬ。それを何の考へ違へか從來の行跡を見るに、道樂者を育てるに道樂を以てしてゐたのである。宿營地の近くに一寸した街がある。日本人も相當に見受けるが、中でも料理屋の前などに佇んでゐる故意につくろつた女は、同胞にして懐かしくもあつたが、併し異國の地であるが故に、殊更見るに忍びなかつた。移民の名の下に入滿する者は多いが、完全にその目的を達成する者は尠いと聞くにつけ憾心に堪へぬものがあつた。大方土地は鮮滿人に耕作させて、自らは鋤鉞をとらず、唯自利に汲々として果ては歸國して虚榮を貪る事が目的らしい。如是は唯自利の爲めのみにして、滿洲の爲めでも、亞細亞の爲めにもなく、況して國家の爲めではない。却つて建設すべき滿洲の聖地を破壊するものである。日系の請負師は有力會社の看板を借りて來てそれを掛け、信用して集る苦力を酷使しては信賴を失墜せしめる。かゝる事例を聞くに忿怒、悲哀を禁じ得ない。個人の問題でなく、國家のそれである。一人一人は一億同胞の代表である。舉手舉足は皇國の動きであり、東洋を左右する羅針を意味するものである。苦力などと侮るが、彼等無學者に對してよき龜鑑として指導して行く處に、始めて彼等をして八紘一字の皇道精神の恩澤の中に浴せしむる事が可能なのであつて、若し然らずし

て之を悪く導く時は、曾ての如き、朝鮮萬歳の聲を聞くと轍を同くする事になりはしまいか。外的には如何に皇軍の威武を發揚しても、內的に缺陷が存しては、今日迄幾多の尊き力によつて築かれたる石疊も、水泡に歸して仕舞ふ事となるのである。是を以て之をなすに、人間よりも彼等の卒先模範となる人物こそ、大東亞建設の第一要請でなければならぬ。

四、瑞穂國

皇祖の神勅に「豊葦原之瑞穂國云々」と仰せられてあるが、的意は日本の農業國たる事を、御示しになつてゐる事は疑はれない。然し今日の農村の現状は最早發展の餘地なき感がある。幸なる哉、昭和の豊葦原、滿洲が發見されたのである。二千六百年瑞穂の國の種子は大和魂と共に滿洲に植ゑられねばならぬ。我國の現状は農業の根本要素たる耕す可き土地がないのみならず、耕作する農民は半商人であり、出來た作物は田畑にある中から商品化されてゐる。常に農業の目的は巧利的にのみ勞力を費し、その報酬を得んとするもので、農事それ自身に叶はぬやり方である。かくて畔切り、水喧嘩、天然の風雨、旱魃、市場の恐慌に悩まされ、農村に於てすら晴れた空はない。況んや都會に於てをやである。併して農家の二男三男は、生涯土地に止つて農事を支持する事が不可能なる故に、都會に職を求めて出で、或る者は商工業に自活の道を拓くも、その多くは純朴さを失つて懦弱な人間となる。盲目的に都會の華かさに憧憬し、自己を忘れて社會に害毒を流す結果となる。この行き詰れる農村問題を解決するの道は大陸への飛躍である。地は天と共に生命の根元をなし、萬物の母たる事は言を俟たぬ。一切の生物は天地によつて興生し、地を覆ふて存するのである。地に強く立脚して自然と共に寝、自然と共に起きて甲斐々々しく働くそれは、禪の無の境地である。米

蒔いて米をとり、豆蒔いて豆を收穫する。この正しき因果を明める經驗は貴い。日本には欲する所の肥沃な耕地がないのである。而して彼の地はあり餘つて居るのである。當然其處に流動的協和が成立すべきである。初め朝鮮に足を踏み入れた時感じた事は、緩い傾斜に木がなく、緑の草山が處々岩石の部分や土膚の部分を残して、打續く様に見える。でも大陸を思はせて、印象を新にしたが、専門家でない自分でさへも、植林を行ひ、農耕を始め、河川工事の完璧を期し、道路の改修をし、交通を盛んならしめる事が、富國の淵源であると感じたのであつたが、更に滿洲は朝鮮の心れとは雲泥の差である。

圖們江(豆滿江)を境界にして、一步彼地へ踏み入れるや、廣漠千里の所謂の滿洲ではなかつたが、黒々とした沃野が、丈餘に伸びる雜草のはびこるに任せて展開し、据えつけた畑作は實によく出来て居る。道路も○○道路は勿論、一般通行路も礫を以てよくし、新たな橋梁も架設されて居り、鐵道も今年一杯には出来ると言ふ。處々四角な煉瓦作りの建物も近年出来たらしい。斯くの如き有様を見るにつけ、建國以來邦人と協力し、長足の進歩をなしつつある事は、一見して讀まれるのであつた。その時自分の手帳にもしたもの、想像の繪である。今迄眠つてゐた百艸が、春の野邊に一齊に擡頭し出して、蕨のやうな揉拳が、大空に擱まらんとする。或は大きな胚芽が二つに開いて、深呼吸でもして、雲の間からさし込む麗らかな陽光を無量に浴びて、無限に育生する形であつた。之が自分の腦髓に深く銘じた滿洲であつた。瑞穂の國は此處なる哉、未墾の沃野が、土の戦士を歓迎してゐる相を見て、大い雀躍したのであつた。

國境地帯は國防上木はない。奥地に入れば木を見るが、其處は未だに匪賊の跋扈する根據地であり、或は虎、彪、熊、狸、狼、獐などの猛獸が棲息してゐる。原始林と言ふのも一度見學したが、豈計らん猛獸のみか、白系露人の住家とな

つて居り、大いに同情するところあつた。毎日起居する邊りの山は實に綺麗であり、原野一面この頃は桔梗、苜蓿、女郎花と言つた内地の盆花で覆はれて居つた。内地では、滿洲は住みにくい處の如く考へ及ぶのであるが、寒暑を凌ぐに足る機關が、彼等幾千年の研究によつてなされてゐるのであるから心配する程ではない。但し何等の自覺なく移民する事は禁物である。現今の國內情勢、殊に農村状態を見る時、喫緊なる事は移民事業である。滿洲を建設すると同時に、日本を建設する事が急務である。大陸飛躍の士は勿論、一億同胞残らず不退轉の信念、建國の精神を遵奉すべきである。興亞を叫ぶ前に先づ脚下より齊へ、血液を同じうする大和民族は、心を結んでから後、同文同種の大陸へ躍進するなり、叫ぶなりして、亞細亞新秩序建設に貢献すべきである。即ちそれが原動力となつて、世界平和建設の鴻業となり得るであらう。

五、興 亞

非常時、超非常時、總動員、盡忠報國、堅忍持久と叫ばれて、今日八巷に強調されるものは、興亞々々である。然らば興亞とは作麼生、蓋し亞細亞をして、本然の亞細亞に歸らしむる事であらう。亞細亞の中には、天理を喪失せる奴隸國もあり、魔手の搾取によつて、この亞細亞に尉斗をつけ提供せんとするものもあつて、日本こそは早くより、幾多の英靈と國帑とを犠牲にして、興亞の大業に之等邪惡を折伏し來つた唯一の國である。現今の東亞は積弊が多く存する。幾千年搖ぎなき富嶽は金甌無缺の日本國體を表徴するものであると言ふならば、その靈峯を遮蔽する雲こそ亞細亞を擾亂せしむるそれである。掃雲の光榮ある使命、之こそ我々が双肩に荷負ふ可きものである。毎月一日を期して興亞奉公日としてゐる。何も一日一回と限つた事ではない。一即一切に亘る興亞奉公日でありたい。正法眼藏行持卷

「一日に無量劫河沙の身命を捨てんことねがふべし法の爲に捨てんかばね世々のわれらかへりて禮拜供養すべし……ただまきに行持なる一日は諸佛の行覆なり」

とあり、この一日こそ貴い。千日萬日もこの一日の延長である。一日一日道の爲に行持するものならば、一切の日に渉る奉公になるもので、生命を省る必要はないのである。

「不修よく人をやぶる」國のため殉じた人は決して亡くならぬ。蓋し一日の行持それは何を行取する事であらうか、直接大陸に涉つて我々の如き足跡を鸚鵡返しする事ではあるまい。鋏とる事でも銃とる事でもない。「法のためにすてん」即ち商法、農法、女法、木法、河法、人法、佛法、禪法、宇宙法のためにすてん事である。故に興亞とはその持場によつて興農であり、興教育であり、興經濟であり、興商工であり、我々ならば興學、興宗教、興禪でなければならぬ。五族協和の實を擧げんとする時、夫々の民族融和の困難なる事實は、當局者によつて示さる所であるが、宗教を以てしてその可能なる事、禪の如何なる役割を受けるかは、茲に喋々する事をさけるが、佛教を通じての融合の可能なる所以は、民族的相違はあつても、過去に於て日本佛教が彼地を経て傳來し來つたものである點よりしても、共通性を見出すに容易である。前述せる如く、滿洲は豊穰なる可耕地であり、且つ金銀、石炭、材木、農作物、及び加工品等無量の財源があるが、未だ精神は興隆されて居らないのである。之が優秀なる大和民族の移民による。皇道精神の光被と、宗教の宣布とによつて啓發せられる事が、興亞の樞要なる條件たる所である。躍進日本の將來が概ね青年の活動舞臺を、大陸に擴充すべく使命付けられてゐる事は、前述の如くであるが、新建設は青年に繼ぐに青年を以てする、民族不斷の努力があつて始めて完成されるのである。今日我々が何の氣なしに、躍進日本、東亞の盟主と言ふ誇張した語を敢て使用するが、その裏面にはかく言ひ切れぬものが存する事を忘れてはならぬ。現地を踏査した者は

殊更此感じを深くする。今かうしてペンを走らせてゐる間でも、同胞の誰かが、血を流し、三寸の氣消じて貴い人柱となりつつある嚴肅な事實を思ひ出すと、突然血管が止つたやうに寒く感じる。この事實あつて躍進日本と言へるのである。國境地帯の皇軍の夏の勤務を見て來たのであるが、到底想像も及ばぬ程である。人跡殆んど絶えた原始林の中に、或は何の蔭もない土の上に、炎熱と戦ひつゝ警備、猛訓練を續けてゐる。

斯うした状況は、自分の拙い言葉ではありの儘表現出來ないが、ともかく彼地は以前より、我々の父祖の血を以て灼熱の山野に、嚴冬の峻嶺に、幾多興亞の礎石を殘し來つた聖地なのである。この聖地に種々なる目的を以て進出する同胞が年々増加する事は欣快の至りである。しかしながらその目的の遠大なるものを擲んで、下に眠れる英靈に報いる覺悟がなければ、初一念に反した結果を來し、又皇謨翼讚の趣旨に悖る事となる。

興亞青年勤勞報國隊綱領

我等勤勞報國隊ハ 皇祖ノ神勅ヲ奉シ協心戮力身ヲ挺シテ興亞ノ天業ニ追進シ神明ニ誓ツテ
天皇陛下ノ大御心ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス

我等一行は此趣旨に基いて御奉公して來たのであるが、少くとも東亞興業の爲めに渡支渡滿せんとする諸彦に對しても此の信念を希望するものである。